

巻 頭 言

ヒューマンサイエンスは、今年で第25巻を数えます。

本誌は大学院生が自らの研究を自主的に推進するための研鑽の場として自主的に運営している研究誌です。四半世紀にわたり、このような学生主体の研究誌が発行され続けたことは本学の自主独立の精神の表れでもあり、大変意義深いことであると感じます。この場を借りてこれまでご尽力くださった皆様に感謝申し上げます。

本誌の構成は、博士前期課程2年生による「修士論文の要約」および、それぞれの研究の骨子やアイデアをまとめた「研究ノート」、さらに実験室を飛び出した現場での研究活動をまとめた「フィールド便り」から成り立っています。今号では、博士前期課程2年生による「修士論文の要約」11編と、博士後期課程、博士前期課程、研究生、心理相談室研修生、そして、矢野准教授による「研究ノート」20編、高橋准教授、今崎研究生による「フィールド便り」2編と各専門領域からの多彩な玉稿が寄せられました。

近年、「ダイバーシティ&インクルージョン」が話題となっています。これは、人材の多様性(=ダイバーシティ)を認め、受け入れて活かすこと(=インクルージョン)を指しますが、まさに人間科学研究科での先進的な学びの特徴を言い表している言葉でもあります。本研究科は「臨床心理学」「人間行動学」「健康科学」「環境科学」と大きく異なる専門分野を擁していますが、それぞれが教員と学生の垣根を超え、自由で創造的な“学問的対話”を通して多様性に拓かれた視点を獲得しつつ、自らの持ち場で専門的研究をさらにブラッシュアップするという共生がなされており、既に「ダイバーシティ&インクルージョン」の場が形成されています。

より良い研究のためには、自らの専門性を探究するだけでは十分ではありません。他の専門領域に目を向け、自分の研究を他の専門家に伝える努力により、研究的な「脱中心化」がはかられ、より次元の高い研究に到達することが可能となります。学際的交流のためには、本学のミッションステートメントに示されている「共感性の高い人格への成長」がまずは重要です。「共感」とは相手に迎合することではありません。相手に関心を向け、自分の見方を一旦置いて、相手の参照枠から物事を見ようとする姿勢や態度を意味します。つまり「学問的対話」は「共感」から始まると言えるでしょう。本学のキリスト教精神に基づく「民主的な学風」も学問的対話を醸成する基盤となっています。そういった土壌があればこそ、クリティカルで創造的なディスカッションが自然になされ、学生や教職員は学問的対話の素晴らしさを、身をもって体験できるのだと思います。本誌から、そのエッセンスを少しでも感じ取って頂ければ幸甚です。

このように恵まれた環境に守られて、意義深い研究が今後も活発になされていくことを期待しています。これからも本学人間科学研究科をよろしくお願い申し上げます。

國吉 知子

(神戸女学院大学大学院 人間科学研究科 研究科長)